

日々の聖句

1月 公生涯（一）



教会暦とデボーション

聖書は「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていないさみ」（第二テモテ2・8新改訳第二版）と教えています。教会はこの御言葉に基づいて、「クリスマス」と「イースター」を軸に一年の礼拝のサイクルを組み立てました。

12月25日の「降誕日」（クリスマス）の四週前の日曜日から「待降節」（アドベント）を始め、クリスマスの後、1月6日の「公現日」（エピファニー）からはキリストの公生涯をたどります。

そしてイースターの前の週を「受難週」（「聖週間」と呼んでキリストのエルサレムでの最後の一週を覚えます。この聖週間の四十日前が「四旬節」（レント）で、キリストの受難への道をたどります。

イースターの後四十日して「キリストの昇天日」を、その後さらに十日して「ペンテコステ」（聖霊降臨日）を祝います。

一年を神の救いの歴史を圧縮したものと考え、父なる神のみこころから出て、キリストによつて成就し、聖霊によつて私たちのものとなった偉大な救いの御業を毎年くりかえし覚えるのが教会暦です。

『日々の聖句』ではこの教会暦にそつて聖書を読み進んでいきます。教会暦が12月から始まるように、『日々の聖句』も12月から始まります。時計が12時から始まるように、個人のデボーションのサイクルを『日々の聖句』とともに12月から始めましょう。

<http://penguinclub.net/mokusou/> に『日々の聖句』のウェブページがあります。ぜひ訪れ、コメントを書き込んでください。

幼子の名はイエスとつけられた。(21)

「名をつける」という行為には、名付けたものを支配するという意味があります。アダムを創造された時、主は「彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう」(創世記1・26)と言われましたが、アダムはそのことを、すべての家畜、空の鳥、野の獣に「名をつける」(創世記2・20)ことよって実行しました。士師の時代、ダン族はライシュという町を攻め取り「ダン」と改名しました。それよって、その町への支配を宣言したのです(士師18・29)。

神の御子にも「イエス」という名が与えられましたが、そう名付けたのはヨセフでもマリヤでもありません。名付け手は父なる神です。このことは、人間が自分勝手にイエスに名を与えることが

できないことを教えています。

しかし、人々はイエスに好き勝手に名を与えてきました。ユダヤの人々は、イエスを「ヨセフの子」や「ナザレのイエス」と呼び、「バプテスマのヨハネ」、「エリヤ」、「エレミヤ」、「預言者」などと同一視しました(マタイ16・14)。現代、人々はイエスを「スーパー・スター」、「ユダヤ教の異端児」、「キリスト教の教祖」、「お友だちイエス」、「スピリチュアル・リーダー」などと名づけ、そう呼ぶことよって、「イエス」の名を力のないものにしていきます。そのような時代だからこそ、信仰者はより一層、「イエス」の名を持つ意味を知り、その力を証しする責任があるのです。

祈り 主よ。イエスの名を呼ぶ私たちに、御名の力をさらに体験させてください。

幼子を主に献げるためであった。(23)

「最初に胎を開くものはみな、主のものとして
 献げなければならぬ。」(出エジプト記 13・
 12) この規定は「過越」から来ています。エジプ
 トがイスラエルを去らせなかつたため、主はエジ
 プトのすべての初子を、ファラオの息子から家畜
 の初子に至るまですべて滅ぼされました。しか
 し、イスラエルの初子は、過越の子羊の血によつ
 て贖われたため、殺されずに済みました。それ以
 来、長子が生まれたときは、長子の代わりに犠牲
 を献げて、長子を「贖う」ようになったのです。
 この時の犠牲は、本来は「子羊一匹と、家鳩の
 ひなか山鳩を一羽」なのですが、「羊を買う余裕
 がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひな」
 でも受け入れられました(レビ記 12・6~8)。
 ヨセフとマリアには、子羊を買う余裕がなかつた

ので、貧しい人たちのための規定に従って犠牲を
 献げました。このことは、イエスがどんなに貧し
 くなつてくださったかを物語っています。聖書に
 「主は富んでおられたのに、あなたがたのために
 貧しくなられました」(第二コリント 8・9)と
 ある通りです。

生後四十日目にイエスが主に献げられたこと
 は、やがてイエスが、全世界の罪のための贖いの
 犠牲として献げられる日がやってくることを暗示
 しています。この時子羊が献げられなかつたの
 は、ヨセフとマリアの貧しさゆえでしたが、イエ
 スご自身が「神の子羊」でもあつたからです。イ
 エスは生涯のはじめから十字架への道を歩んでお
 られたのです。
 祈り 主よ。あなたの貧しさの中にある救いの富
 を感謝します。

私の目があなたの御救いを見たからです。(30)

ルカの福音書にはザカリヤ(1・67〜79)、マリア(1・47〜55)、そしてシメオン(2・29〜32)の賛歌があります。これらはそれぞれ朝、夕、そして就寝前の祈りに用いられました。一日を「ザカリヤの歌」によって救いの待望を始め、夕べに「マリアの歌」によって賛美と感謝を捧げ、夜には「シメオンの歌」を歌って、平安と満足のうちに眠りにつくことができたなら何と幸いなことでしょうか。

近年、「シメオンの歌」を礼拝の終わりに、会衆一同で歌う教会が増えてきました。礼拝とは神の救いを見ること、それを知り、確信し、体験することです。賛美の中に、説教の中に、祈りの中に、とりわけ聖餐の中にイエス・キリストによって成し遂げられ、今も、私たちの内に働いている

神の救いを見ることです。そして、主の救いを見て、平安のうちに礼拝の場から送り出されていく。それこそが主が私たちに与えてくださった礼拝の恵みです。そんな意味では、「シメオンの歌」を最後に歌うのは、礼拝にふさわしいと思います。

私たちも、一日の終わりに、また週ごとの礼拝の最後に、シメオンの賛歌を心から歌うことができたなら幸いです。そのように、日々を送り、毎週の礼拝を重ね、生涯の終わりにも、「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです」と祈ることができるようになりたいと思います。

祈り 主よ。シメオンのような満ち足りた生涯を、私たちにも与えてください。

あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。(35)

「シメオンの預言を聞いたこと」、「エジプトに逃れたこと」、「12歳のイエスを見失ったこと」、「十字架を背負われたイエスに出会ったこと」、「イエスの十字架の死を見たこと」、「イエスの遺体を引き取ったこと」、「イエスを葬ったこと」の七つは「マリアの七つの悲しみ」と呼ばれます。

子どものために苦しまない母親は誰もありません。母親は子どもを産むとき、すでに「産みの苦しみ」をしています。母マリアはイエスのために産みの苦しみや、育てる苦しみをしただけではなく、イエスが父なる神のみこころを果たすための苦しみをも共にしました。その第一のことが「シメオンの預言を聞いたこと」でした。シメオ

ンが語った「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています」という預言はなんとも不吉なものでした。シメオンは「あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります」と預言しましたが、その預言の成就を待つまでもなく、その預言を聞いたその時、マリアの心は剣で刺されたように痛かったに違いありません。

マリアは母として、その痛みに耐えたばかりでなく、主を信じる者として「キリストの苦難にあずかり」（ピリピ 3・10）、主に仕える者として「キリストの苦しみの欠けたところを満たし」（コロサイ 1・24）ていたのです。

祈り 主よ。私たちがあなたのための苦しみを避けることがないようにしてください。

ちやうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った(38)

シメオンの他に、アンナも幼子イエスのもとにやってきました。救いを求め、待ち望み、それを求めて祈る者は、磁石に引き寄せられる金属のようには、イエスのもとに引き寄せられてきました。

救い主を待ち望んだ人々は、たとえ救い主が飼葉桶の中に寝かせられていても、貧しい夫婦の赤子として宮に連れて来られても、イエスに引き寄せられ、この赤子こそ「世の救い主」であること知ることができました。

十字架上の強盗も、イエスが姿かたちが変わるほどに痛めつけられ、十字架の上で息も絶えだえになっただけでも、イエスが救い主であることを知って、イエスに向かって「あなたが御国に入ら

れるときには、私を思い出してください」と言っていて、イエスが、やがて御国の王座につくべきお方であると認めています。

まことの神を知らない人々は、ご利益を得ようとして神々を参拝しに行きます。イエスを「信じると言う人の中にも、それと同じ態度でイエスのもとに来る人がいるかもしれませぬ。しかし、そのようにしては、本当の意味でイエスに近づくことはできません。本当の信仰者には、イエスが神の御子また子なる神、世の救い主また我らの主であることを知り、ご利益以上のものを求めてイエスに近づくことが求められています。そしてそれは、聖霊によつて、主のもとに引き寄せられてこそ、可能となるのです。

祈り 主よ。聖霊によつて私たちをあなたのもとに引き寄せてください。

それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。(11)

1月6日は、東方の賢者たちが幼子イエスを礼拝したことを記念する日で、イエスが異邦人の救い主でもあることがおおよけに現されたので「公現日」(エピファニー)と呼ばれます。

東方の賢者たちがエルサレムにやってきた時、ヘロデ大王は祭司長や律法学者に聖書を調べさせ、救い主の誕生の地がベツレヘムであることを知りましたが、その心に救い主を殺そうとする企てを持ちました。救い主がベツレヘムで生まれることを知っていた人々の誰も、救い主を礼拝するためベツレヘムに行こうとはしませんでした。聖書の知識は彼らを救い主へと導くものとはならなかったのです。

しかし、東方の賢者たちは違いました。彼らは

神の言葉が告げることに従い、それを行動に移すことによつて、救い主に会うことができました。

神の言葉はそれを持っている、知っているというだけでは、私たちのうちに働くことはありません。それは「聞いた人たちに信仰によつて結びつけられ」(ヘブル4・2)なければならないのです。東方の賢者たちは、ユダヤの祭司長や律法学者にくらべ十分な聖書の知識を持っていなかったかもしれませんが、「私たちは…礼拝するために来ました」(2)という、はつきりした目的を持っていました。救い主を礼拝したいという願いをもって尋ね求める者は、必ず、救い主に出会うことができるのです。

祈り 主よ。あなたを礼拝するためにという願いを持って聖書を学び、その知識が私たちをあなたへの礼拝に導きますように。

わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した。(15)

東方の賢者たちが帰ったあと、御使いがヨセフに「立って幼子とその母を連れてエジプトへ逃げなさい」と告げたのは、イエスがヘロデ大王の手から逃れ、当時エジプトにあったユダヤ人コミュニティの中で守られるためでした。

しばらくして、ヘロデ大王の死を伝え聞いたヨセフはマリアと幼子連れ、エジプトを出てイスラエルに戻りました。このことは、「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した」(ホセア11・1)という預言が成就するためでした。ホセア書は、神がイスラエルを「わが子」と呼んで愛したのに、イスラエルは「呼べば呼ぶほどますます離れて行き、もろもろのバアルにいけにえを献げて、刻んだ像

に犠牲を供えた」(ホセア11・2)と言っています。イスラエルはエジプトから救われ、神の民になったのですが、神の民としての忠実な歩みをすることがありませんでした。救い主は彼らを救うため、彼らがたどった道をたどり、彼らの不信仰の歴史を信仰の歴史に替える必要があったのです。それでイエスもまたエジプトに下り、そこから呼び出されるといふ道筋を通られたのです。

神は敬虔なヨセフとマリアを選び、イエスの生涯が幼少期から神のみこころに従ったものになるようにされましたが、それらすべては、イエスを信じる者たちが、イエスにあつて神の前に正しい者とみなされるためだったのです。

祈り 主よ。あなたが私たちの代わりに父なる神のみこころのすべてを成就してくださいましたことを感謝します。

そのとき、預言者エレミヤを通して語られたことが成就した。(17)

ヘロデ大王は、自分の王位をおびやかすおそれのある人々を、たとえ自分の子どもであっても、殺害するような人物でした。当時、「ヘロデの息子になるよりはブタになったほうがましだ」ときさやかれたほどでした。「ユダヤ人の王」がベツレヘムで生まれたと聞いて、彼はベツレヘムの幼な子を皆殺しにしました。

このことはエジプトの王がユダヤ人の増えるのを恐れて、生まれた男の子を殺害したことを連想させます。この世の力は常に神の民を苦しめようとしています。しかし、神は、ファラオの手からモーセを守り、同胞を救い出す者とされたように、ヘロデ大王の手からイエスを守り、世の救い主としてその御業を果たすことができるようにしてくだ

さいました。

マタイはこの出来事をエレミヤ 31・15で語っていた預言の成就であると言います。幼な子の虐殺や子を亡くした母親の嘆きなどは成就してもらいたいくない預言ですが、この預言には「あなたの泣く声、あなたの目の涙を止めよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。——主のことば——彼らは敵の地から帰って来る。あなたの将来には望みがある。——主のことば——あなたの子らは自分の土地に帰って来る」(エレミヤ 31・16、17)という言葉が続いています。神の言葉は常に希望を与えます。私たちの嘆き、悲しみ、痛みはむなしく終わらず、その後にならず癒やし、平安、報いがあるのです。

祈り 主よ。あなたが備えておられる将来の望みを苦難の日に見出すことができますように。

これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。(23)

「彼はナザレ人と呼ばれる」という預言は、そのままでは旧約にはありませんが、「エツサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ」(イザヤ11・1)の「若枝」と「ナザレ」とがヘブライ語では発音が似ているので、それはイエスが「若枝」と呼ばれている、この箇所から取られたと思われる。

イザヤ53・2〜3では、「若枝」が「ひこばえ」とも呼ばれています。「彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。

人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。「ひこばえ」とは太い幹の切り株から生えてくる若枝のことです。ダビデ王朝はバビロンに滅ぼされ、ゼデキヤ王で終わりました。けれども、イエスは切り倒されたダビデ王朝から「ひこばえ」となって生まれました。「ひこばえ」には「見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えも」ありませんでした。人々は「ナザレから何か良いものが出るだろうか」(ヨハネ1・49)と言い、軽蔑の意味を込めてイエスを「ナザレ人」と呼びました。「彼はナザレ人と呼ばれる」というのは、イエスが人々から卑しめられながらも人々を救う者となることを言っています。祈り 主よ。あなたは人に蔑まれましたが、私たちに天の栄光を与えてくださいました。私たちはあなたの栄光を賛えます。

それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。(51)

ユダヤでは男子は13歳で成人し、「バル・ミツバー」(律法の子)となります。イエスが12歳のとき両親に伴ってエルサレムに上ったのは、次の年の「バル・ミツバー」に備えるためでした。当時、エルサレムへの巡礼団は男性のグループと女性のグループに分かれており、未成年の子どもは父親のがわにも、母親のがわにも加わることができました。両親がエルサレムからの帰路一日たつてからやっとイエスがいないことに気づいたのは、互いにイエスが相手のグループにいるだろうと思いきんでいたからでした。

両親が引き返すとイエスは神殿にいて学者たちに質問していました。母がイエスに語りかけると、イエスは「どうしてわたしを捜されたのです

か。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか」と答えました。このとき母はこの言葉の意味を理解できませんでした。後に、イエスを亡くし、「三日」の後に復活されたイエスにまみえることによつて、すべてを知るようになるのです。

イエスは成人前からご自分が神の御子であることを自覚しておりましたが、ご自分の神性を秘めて「両親に仕え」ました。「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです」(マルコ10・45)と言われたイエスは、人々に仕える前に、両親にお仕えになったのです。

祈り 主よ。しもべとなって来られたあなたに、私たちが做うことができますように。

ヨハネはヨルダン川周辺のすべての地域に行つて、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣傳伝えた。(3)

バプテスマのヨハネは自らを「荒野で叫ぶ者の声」(イザヤ40・3、ヨハネ1・23)と呼びました。ヨハネは人々にバプテスマを授けるだけでなく、神のみこころを語り伝え、人々を悔い改めに導きました。そして、その悔い改めのしるしとしてバプテスマを授けたのです。

ここでバプテスマは「罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ」と呼ばれています。しかし、バプテスマのヨハネが導くことができたのは「悔い改め」までで、「罪の赦し」は救い主によらなければ与えることができません。ヨハネはそのことをよく知っていました。彼の務めは人々を救い主へ導き、救い主から罪の赦しを得る備えをさせるこ

とにあったのです。

ペンテコステの日、ペテロは「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によつてバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」(使徒2・38)と言いました。ペテロの言葉にも「悔い改め」と「バプテスマ」がありますが、それ以上のもの「イエス・キリストの名」と「罪の赦し」、そして「聖霊」があります。キリストを信じて受けるバプテスマはヨハネのバプテスマにはるかに勝っています。ヨハネが教えた「悔い改め」は主イエスの名によるバプテスマにも引き継がれています。バプテスマが教える悔い改めを忘れることがないようにしたいと思います。

祈り 主よ。バプテスマを常に思い起こし、いつでも悔い改めに立ち返ることができるようになります。

それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。(8)

ユダヤの人々は自分たちは「アブラハムの子」で、救いの特権を持っていると考えていました。

それで、バプテスマのヨハネは人々に、もしアブラハムを父に持つというのなら、「悔い改めにふさわしい実」を結ぶようにと教えました。

では「悔い改めにふさわしい実」とは何でしょう。バプテスマのヨハネの教えはきわめて単純です。人々には「下着を二枚持っている人は、持つていない人に分けてあげなさい。食べ物を持つていない人も同じようにしなさい」と言い、取税人たちには「決められた以上には、何も取り立ててはいけません」と教え、兵士には「だからからも、金を力づくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい」と命じま

した。なすべき善を行い、不正を働かず、権力を濫用しないなどは、ごくあたりまえのことですが、そのあたりまえのことをできなくさせるのが「罪」です。自分が人間としてあたりまえのことさえできない「罪びと」であることを認め、神の助けによって、物の考え方、態度、生活を変えていくことが悔い改めです。悔い改めはたんに過去を嘆いたり、自分を責めたり、悲しんだりするだけのものではなく、生き方を、日常の生活を、そして人生全体を変えていくものです。「悔い改めにふさわしい実」は、手の届かないところではなく、私たちの生活の身近なところにあるのです。祈り 人々はヨハネに「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか」と問いました。主よ。私たちが常にあなた問いながら、悔い改めの実を結ぶ者となれますように。

このようにヨハネは、ほかにも多くのことを勧めながら、人々に福音を伝えた。(18)

ルカは、イエスだけでなく、バプテスマのヨハネもまた「福音を伝えた」と言っています。バプテスマのヨハネは「悔い改め」を説きましたが、

「悔い改め」は「福音」の一部ですから、バプテスマのヨハネは「悔い改め」を説くことによって「福音」を伝えたこととなります。またバプテスマのヨハネは来るべき救い主を証しし、聖霊のバプテスマに言い及んでいます(ルカ3・16)。それで、マルコはバプテスマのヨハネの宣教活動を「福音のはじめ」(マルコ1・1)と呼び、ルカは、彼が「福音を伝えた」と言ったのです。

しかし、イエスの福音はバプテスマのヨハネが語ったものに勝り、それを成就するものでした。バプテスマのヨハネはやがて来られるキリストと

その審判の時を預言しましたが、イエスは、神の国がすでに来たこと、ご自分が御国の王であり、

キリストであることを宣言されました。御国の到来を、聖霊による力あるわざによって、人々の目の前に示されたのです。バプテスマのヨハネが語ったことは預言であり、証してしたが、イエスはその成就であり、実体です。バプテスマのヨハネは「荒野で叫ぶ者の声」でしたが、キリストは「ことば」(ヨハネ1・1)です。バプテスマのヨハネは「燃えて輝くともしび」(ヨハネ5・35)でしたが、イエスは「まことの光」(ヨハネ1・9)です。ヨハネの語った福音はイエスによって実現したのです。

祈り 主よ。あなたが預言を成就し、福音の主題となり実体となってくださったことを感謝します。

あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。(22)

1月6日は西方教会では「公現日」ですが、東方教会では主のバプテスマを記念する日です。主はヨハネからバプテスマを受けて「公生涯」を始められたのですから、「公現日」がバプテスマの日であるのは理にかなっています。西方教会では公現日の次の日曜日を主のバプテスマの記念日とし、主のバプテスマの記念日が日曜日になるようにしています。文化の違いから東方と西方では礼拝の形式が異なりますが、どちらも、主のバプテスマを大切なものとしています。

イエスはバプテスマによってご自分を公けに現されたのですが、その時、父なる神と聖霊なる神も、ご自身を現しておられます。父なる神は「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜

ぶ」という御声をもって現れ、聖霊は「鳩」の姿で現れ、イエスの上に降って来られました。「あなたはわたしの愛する子」は詩篇2・7、「わたしはあなたを喜ぶ」はイザヤ42・1に見られる言葉で、イエスの神性と使命をそれぞれに明らかにしています。

イエスは悔い改めの必要のないお方であるのに、「悔い改めのバプテスマ」を受けました。それによって、イエスこそ「罪の赦し」を与えることのできるお方であることが示されるためでした。イエスの受けたバプテスマは、私たちを「罪の赦しに導く」(マルコ1・4、ルカ3・3)ものであったのです。

祈り 主よ。あなたがバプテスマを受けて、私たちのために罪の赦しを確かなものとしてくださったことを感謝します。

エノシユ、セツ、アダム、そして神に至る。(38)

ルカが書いたイエスの系図は、マタイのものとダビデ以降が違っています。マタイはヨセフの祖先をソロモンからたどっていますが、ルカはダビデの別の子ナタンからたどっています。どちらが正しいのでしょうか。

どちらも正しいのです。ユダヤでは夫を亡くした女性が、夫の兄弟と再婚して家名を残す慣わしがありました。その場合、系図が実際の血縁を反映しなくなります。それで律法上の系図と、実際の血縁の系図の二つが作られました。マタイは律法上の系図を採用し、ルカは実際の血縁に基づいた系図を採用したのです。

マタイはその系図によってイエスがダビデ王朝の継承者であり、御国の王であることを伝えよう

としましたが、ルカは別の系図を選び、それをアダムに遡らせることによって、イエスが「ダビデの子」、また「アブラハムの子」として、ユダヤの人々を救うだけでなく、アダムに代わって全人類を救うお方であることを伝えようと思いました。パウロはローマ5・12〜21で、すべての人はアダムにあって罪を犯し不義に定められたが、「第二のアダム」であるキリストにあって義とされると論じています。キリストはユダヤの人々だけでなく、「第二のアダム」となることによって全人類の代表となり、全人類の救い主となってくださいなのです。ルカは、パウロが論じたことをこの系図によって実証しようとしたのです。

祈り 主よ。あなたはすべての人があなたによって救われるため、「第二のアダム」となってくださいました。あなたを崇め、感謝します。

御霊によって荒野に導かれ、四十日間、悪魔の試みを受けられた。(1~2)

この箇所は「聖霊がイエスを試練に遭わせた」と言っているかのようです。マルコ1・12には「それからすぐに、御霊はイエスを荒野に追いやられた」とあって、聖霊が、まるで動物に鞭をあてて駆り立てるように、御子を荒野の試練の場に「追いやった」と書かれています。これは、聖霊が御子に対してさえ主権を持つておられる神であることを示しています。イエスを荒野に導かれた聖霊は、同時に、イエスのうちに「とどまって」(ヨハネ1・32~33)、イエスと一緒に荒野に向かわれました。聖霊は、荒野でもイエスと共にいて、悪魔の試みにに遭ったイエスを助けました。

イエスが過ごした荒野の四十日はイスラエルの荒野の四十年を表します。イスラエルは荒野の四

十年の間、神につぶやき、逆らいました。彼らは「神を試みた」のです。神が人を試みるのがあっても、人が神を試みることは許されません。イエスは「あなたの神である主を試みてはならない」との御言葉によってサタンを斥け、イスラエルの四十年の不従順を贖われたのです。

イエスはこのことを「聖霊に満ちて」成し遂げました。そして、それを成し遂げた後は「御霊の力を帯びて」(ルカ4・14)ガリラヤに帰りました。私たちも聖霊の満たしと力なしには誘惑に勝ち、主のわざを行うことができません。イエスは、ご自分に従う者に聖霊の満たしと力とを約束しておられます(ルカ12・11~12、第一ペテロ4・14)。主に求め、それを得ましょう。

祈り 主よ。あなたに宿った聖霊が私たちにも与えられていることを感謝します。

あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。(21)

「会堂」(シナゴーク)はイスラエルが神殿を失い、外国に寄留するようになって生まれたもので、人々は神殿の代わりにそこで礼拝を捧げました。エルサレムに神殿が再建された後も、ユダヤの各地に会堂があつて、安息日ごとの礼拝が行われていました。とくに、神殿から遠いガリラヤ地方では会堂での礼拝が大切にされていきました。イエスはバプテスマと荒野の四十日を経て故郷ナザレに帰り、その会堂で説教をしました。

イエスの朗読した箇所はイザヤ61章でした。イエスは聖書の朗読に続いて「今日、この聖書のことばが実現した」と宣言しました。「主の霊がわたしのの上にある。…主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた」の「わたし」とは、イエスご自

身のことであることを明らかにされました。「わたしがいざやが預言した救い主である」と宣言したのです。人々はその教えに驚きました。

当時のラビ(教師)たちは、聖書に事細かな注釈を加えるだけで、聖書の言葉が人々の心に届くことがなく、その生活、社会、さらには世界を変えることはありませんでした。しかし、イエスは、聖書によつてご自身を示し、聖書の言葉を実現し、この世界を変えてくださいます。私たちもキリストを証しするものとして聖書を読み、聖書が指し示すイエス・キリストが今、ここにおられることを体験していきたいと思えます。聖書の言葉や文字が実現していくのを日々に見る者でありたく思います。

祈り 主よ。私たちの心に、生活に、あなたの言葉が実現するのを見ることができまますように。

しかし、イエスは彼らのただ中を通り抜けて、去って行かれた。(30)

イエスの故郷の人々はイエスの語ることに驚きましたが、イエスを「ヨセフの子」として評価するだけで、聖書が預言した救い主として受け入れませんでした。彼らは「ヨセフの子イエスのことから、自分たちは良く知っている。最近姿が見えないと思つたら、カペナウムで説教したり、奇蹟を行つているといふじやないか。自分が救い主だと言ふのなら、カペナウムでしたという奇蹟をここでも見せろ」と要求したのです。

それに対してイエスは、聖書からエリヤがシドンのやもめにしたことやシリアの將軍にしたことを引きました。神の民が異邦人よりも心をかたくなにしていたため、預言者たちがイスラエルで力あるわざができなかつたように、イエスの故郷ナ

ザレの人々も心をかたくなにし、イエスを斥けました。ナザレの人々は、神の民全体を代表しています。イエスはまず、ご自分の民に救いを提供したのに、ユダヤの人々はそれを受け入れなかつたのです。「この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかつた」(ヨハネ1・11)との御言葉の通りです。

神の民には神の言葉が与えられています。イエスが神の民に期待なさつたのは、奇蹟によつてではなく、神の言葉によつて信仰を持つことでした。どんなに奇蹟を目の当たりにしたとしても、御言葉によつてイエスを確信するのではありません。結局のところ、私たちは、イエスを去らせてしまうことになるのです。

祈り 主よ。私たちを、御言葉によつてあなたを信じる者としてください。

そのことばに権威があつたからである。(32)

イエスの言葉は「恵みのことば」(22)と呼ばれましたが、それは同時に「権威あることば」でもありした。マルコ1・22によると、イエスは「律法学者たちのようではなく、権威ある者として教え」、人々はイエスの教えを「権威ある新しい教え」だと言いました。イエスの言葉の権威は、汚れた霊、つまり悪霊がそれに従うことによつて証明されました。人々は悪霊が人から出ていくのを見て、イエスの言葉の権威を認めずにはおれませんでした。

イエスの言葉は、悪霊に対してばかりでなく、病氣に対しても力がありました。イエスはシモンの姑を癒やし、イエスのもとに連れてこられた多くの病人を癒やしました。しかも、イエスは「一人ひとりに手を置いて」(40)人々を癒やしまし

た。イエスはそれによつて病氣に苦しむ人々へのあわれみを示されました。癒やしは力あるわざであると共にあわれみのわざでもあるからです。

ナザレの人々はイエスを追い出しましたが、カナウムの人々はイエスを「引き止めておこう」としました(43)。しかし、この行為もまたナザレの人々と同じく、イエスの主権に従うものではありませんでした。イエスの「恵みのことば」、
「権威あることば」は、それを必要としている人々に届けられなければならないからです。常に主と共にいることを願うのであれば、私たちは主が進まれるところに進み、主が留まつておられるところに留まらなければならないのです。
祈り 主よ。私たちが、あなたを締め出したり、あなたの働きを妨げることがないようにしてください。

主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。(8)

シモンはとれるはずのない時間に、とれるはずのないところで大漁の魚が網に入ったので、恐れに満たされてイエスの足もとにひれ伏し、「主よ、私から離れてください」と叫びました。それまではイエスを「先生」(5)と呼んでいたのに、ここでは「主よ」と呼んでいます。シモンはそれまでもイエスが悪霊を追い出し、病いを癒やすのを目撃してきました。しかし、この奇蹟は、ガリラヤ湖とそこに棲む魚のことならなんでも知っているとは自負していた漁師シモンの自信を打ち砕くものでした。

人は力あるお方に出会って、自分の無力を知り、聖なるお方に出会って自分の罪深さを知ります。その時に知る「罪深さ」というのは、過去の

過ちに対する自責の念とか、自らのうちにある邪念に対する嫌悪などといったもの以上のものです。それはイザヤが「高く上げられた御座に就いておられる主を見て」「ああ、私は滅んでしまおう」(イザヤ6・1~5)と言ったときに感じた「罪深さ」です。絶対者、創造者の前に、束の間存在でしかない被造物として立つ恐れとおののきです。

イエスはガリラヤ湖に浮かぶ漁師の小舟を聖所に変え、そこでご自分の栄光を現されました。イエスの栄光に触れたシモンは「私から離れてください」と言いましたが、イエスはシモンをご自分に近づけ、彼に人々をすなごるといふ、栄光ある務めをお与えになりました。

祈り 主よ。私たちの日々の空間をあなたの聖所とし、そこであなたの栄光を仰がせてください。

イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。(13)

日本では長い間、ハンセン病への誤解や患者への差別があつたため、「らい」と訳されていたところは、新約であつても、ヘブライ語のまま「ツアラアト」と訳されることになりました。

ツアラアトは病気であると共に「汚れ」とみなされていたので、ツアラアトに冒された人は「私を癒やすことがおできになります」ではなく「私をきよくすることがおできになります」と言い、イエスもまた「きよくなれ」と言われました。

それにしても、「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります」とは、じつに大胆な信仰です。イエスが何も言わなくても、何もしなくても、その意志を働かせるだけで、ツアラアトさえきよめられるというのですから。ツアラア

トに冒された人は、イエスにはそれができるといっただけでなく、さらに、それをしてくださると信じて、そう言ったのです。

イエスはその信仰に答え、そのお心を動かすだけでなく、ツアラアトの人に手を伸ばし、彼に触り、「きよくなれ」と命じました。当時、ツアラアトの人に触れることは宗教的な汚れをもたらしと考えられていたのですが、イエスはそのような隔てを越えて手を差し伸べ、この人への愛を示されました。同じ主の御手と言葉が、「きよめ」を求めの人に差し出されます。主は、私たち汚れた者を斥けるのではなく、私たちを汚れからきよめようとしてくださっているのです。

祈り 主よ。自分の罪深さを知り、「きよめ」を求め私たちにも、「わたしの心だ。きよくなれ」と語りかけてください。

しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持つて
いることを、あなたがたが知るために——。(24)

律法学者、パリサイ人は、イエスが人々を教え
ている所どこにでも出かけていきました。イエス
の教えを批判するためでした。彼らは、イエスが
中風の人に罪の赦しを告げるのを聞いて、「神へ
の冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ」と
つぶやきました。旧約時代、祭司や預言者は神に
代わって罪の赦しを宣言しましたが(第二サムエ
ル12・13)、罪を赦すことができるのは神のみで
した。ダビデは「私の背きを主に告白しよう」と
言って、主に赦しを請いました(詩篇32・5)。
ソロモンは「あなたご自身が、御座が据えられた
場所である天から聞いて、赦し…てください」
(第二歴代誌6・30)と祈り、神もまた「わたし
の名で呼ばれているわたしの民が、自らへりくだ

り、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求めてその
悪の道から立ち返るなら、わたしは親しく天から
聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地を癒やす」
(同7・14)と答えておられます。

「神おひとりだけが罪を赦すことができる」と
いうのはその通りです。しかし、パリサイ人たち
がそう言ったのは、イエスが罪からの救い主であ
り、罪の赦しを与えることのできる神であること
を認めなかったからです。イエスは中風の人を癒
やすことによつてご自分が罪の赦しの権威を持っ
ていることを示されたのに、彼らはその奇蹟を見
て驚くだけで、イエスを正しく知り、認め、信じ
ることはありませんでした。
祈り 主よ。あなたの力ある御業だけでなく、あ
なたがご自分を明らかにされたお言葉に驚く私た
ちとしてください。

新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れなければなりません。(38)

パリサイ人たちは、レビがイエスのために催した食事の席にまで出かけていき、「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのか」と言つて、イエスの弟子たちを非難しました。それを聞きつけたイエスは弟子たちに代わつてその非難に答えられました。

イエスは、レビの家での食事を「婚宴」に例え、ご自分を「花婿」と呼び、弟子たちを「花婿の友人」(34)と呼びました。「婚宴」は神の国を、「花婿」は御国の王を、「花婿の友人」は御国の民をさす言葉です。イエスの宣教の第一声は「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1・15)でしたが、レビの家での食事は悔い改めて福音を信じた人々のう

ちに神の国が来たことを物語るものでした。

36〜39節の譬にある「新しいぶどう酒」は、イエスと共にいる喜びを表しています。新しいぶどう酒が発酵し続けているように、神の国の喜びは信仰者の内面から湧き上がり、尽きることがありません。この喜びはパリサイ人たちが後生大事にしてきた古い宗教生活、つまり「古い皮袋」に入れておくことはできないのです。イエスはそう語ることによつて、弟子たちを弁護し、同時に神の国が「食べたり飲んだりする」ことを超えた、全く新しい霊的なものであることを教えたのです。「なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだからです。」(ローマ14・17)

祈り 主よ。私たちが御国の喜びで満たしてください。

そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」(5)

神が最初に聖別されたのは「日」でした(創世記2・3)。主は十戒で神ご自身(第一戒)、神の御姿(第二戒)、神の御名(第三戒)、両親(第五戒)、生命(第六戒)、性(第七戒)、所有(第八戒)、真実(第九戒)、内面の思い(第十戒)の聖別とともに、安息日(第四戒)の聖別を命じています。安息日は決して軽んじられてはならないものですが、ユダヤの人々は安息日が本来は神を礼拝し、人々に安息を与えるためにあることを忘れていました。

パリサイ人たちは、イエスの弟子たちが麦の穂を摘んで、手でもみながら食べていたのを非難しましたが、麦の穂を摘み、手でもむことは収穫と脱穀という「労働」であり、安息日の規定を犯し

していると論じたのです。また、パリサイ人たちはイエスが安息日に人を癒やすかどうかをうかがっていました。イエスは、そのことを知りながら、手の萎えた人を、あえて安息日に癒やしました。ご自分が「安息日の主」、つまり安息日に礼拝されるべきお方、また、人々に安息を与えるお方であることを示すためでした。

イエスは常にご自分が何者であるかを明らかにし、それに基づいて私たちに新しい生き方を求めてこられました。私たちも主を知ることによって生き方を変えていく必要があります、生き方を変えるためにはイエスがどのようなお方なのかを知る必要があるのです。

祈り 主よ。安息日の主であるあなたを知ることによって、安息日をそれにふさわしく過ごすことができるようにしてください。

その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。(13)

イエスは弟子たちの中から十二人を選び、「使徒」と呼びました。福音書では、選ばれた十二人は「使徒」と呼ばれると共に、たんに「十二人」とだけ呼ばれることもありますが、使徒の働きでは6・2を除いてはすべて「使徒」と呼ばれています。それは「使徒」を選び、立てられたのがイエスご自身であり、その務めが重要なものだったからです(エペソ4・11)。イエスは夜を徹して祈り、父なる神のみこころに従って十二名を選びました。

ところが、そのリストの最後には、自分の師であり、主であるイエスを「裏切る者となった」ユダの名があるのです。父なる神のみこころの中にユダの名があり、イエスはそれに従ってユダを選

んだのです。なぜ、御父は御子にユダを選ばせたのでしょうか。この地上では、みこころのすべてを理解することはできませんが、ひとつだけ分かることは、イエスが使徒たちを選んだ時点ですでに、弟子たちに裏切られ、十字架の苦難を受けるという、父のみこころを受け入れていたということです。イエスは故郷の人々に斥けられ、崖から突き落とされそうになりました(ルカ4・30)。パリサイ人の間には、イエスをどうにかしようとする相談がありました(同6・11)。それでも、イエスは人々を愛し、弟子たちをいつくしんで、父より与えられた務めを忠実に果たしました。この使徒たちのリストの中にもイエスの御父への服従を見ることが出来ます。

祈り 主よ。あなたが御父に従ったように、私もあなたに従うことが出来ますように。

貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。(20)

モーセは世を去る前、約束の地に入ろうとしている人々に教えました。「もし、あなたが、あなた、主の御声に確かに聞き従い、私が今日あなたに命じる主のすべての命令を守り行うなら、：あなたは町にあつても祝福され、野にあつても祝福される。あなたの胎の実も大地の実りも、家畜が産むもの、群れの中の子牛も群れの中の子羊も祝福される。あなたのかごも、こね鉢も祝福される。」(申命記 28・1～5)しかし、主の御声に聞き従わなければ、「町にあつてもものろわれ、野にあつてもものろわれる。あなたのかごも、こね鉢ものろわれる」(同 28・15～68)のです。

モーセが人々に祝福とのろいの両方を示し、祝福を選ぶよう教えたように、イエスも「幸い」と

「わざわい」の二つを人々に示しました。24～26節でイエスは、この世の富は持つていても信仰の富を持たない人、自分をこの世のもので満たし聖霊の満たしを知らない人、罪に悲しむことなく、人からの称賛を得ても神の顧みを受けていない人は「哀れ」だと言いました。しかし 20～23節では、神の前に貧しい人、神の義に飢えている人、自分の罪に泣いている人、信仰のゆえに人々から憎まれている人は「幸い」であると言って、イエスは人々を祝福の道へと招きました。わざわいの道避け、主が備えてくださった祝福の道を歩むこと、それが信仰の歩みです。

祈り 主よ。わざわいとのろいの世界のまっただ中に、あなたは幸いと祝福の道を備えてくださいました。私たちを幸いと祝福の道に歩む者としてください。

詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえませぬ。(38)

良くしてあげたのに、感謝の言葉もないばかりか、非難で返される。困っているだろうと思つて助けてあげたら、時間も金銭もどんどん要求されるという目に遭うことがあります。そんな時は、

「人に良くしてあげても何にもならない。自分のことだけを考え、自分のためだけに物事をしよう」という気持ちになることもあるでしょう。

イエスはそんな私たちに、たとえ人からのお返しがなくても、それがなすべき善であるなら、それを行うよう教えておられます。実際イエスは、敵を愛し、憎む者に善を行い、呪う者たちを祝福し、侮辱する者たちのために祈りました。頬を打つ者に、もう一方の頬を向け、上着を奪い取る者

に下着をも与えたお方です。イエスはいと高き方の御子であり、人々から仕えられて当然なのに、徹底して人々に仕えました。

イエスは教えたことを、ご自分で実行されました。言葉だけで人を教えるのではなく、ご自身とその生涯を実物教材として私たちに与えてくださったのです。

27、38節はイエスに倣つて生きる人への報いの約束です。たとえ人からお返しがなくても、神が期待以上のものをもって私たちに報いてくださいます。この譬で「詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れて」くださるのは、あわれみ深い、私たちの天の父です。

祈り 主よ。神の報いを信じて、あなたに従い歩む者となれますように。

偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。(42)

イエスの教えを聞いている人々の中には、イエスから学ぼうとする人たちがばかりでなく、あらゆる人たちがいました。この部分は、そういう人たちを念頭において語られたようです。パリサイ人について「彼らは盲人を案内する盲人です。もし盲人が盲人を案内すれば、二人とも穴に落ちます」(マタイ 15・12〜14)とされているので、ルカ 6・39の「盲人」もパリサイ人のことでしょう。彼らは、自らを律法に無知な民衆の案内人としていても、律法の本当の意味が見えていない、それを知らないでいたのです。

「弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のよう

にはなりません」(40)というのは、自分自身を訓練していなければ、すぐに弟子に追いつかれてしまう。自分を甘やかしておきながら、教師づらをしてはいけないという意味でしょう。

イエスはパリサイ人たちに「偽善者たちよ」と言っていますので(マタイ 15・7、22・18)、42節の「偽善者」というのもパリサイ人に向けられた言葉でしょう。パリサイ人たちは、人々の日常生活全般に深くかかわり、それを指導していました。それは他者のためというよりは、それによって人々に干渉し、人々を自分の支配下に置くためでした。私たちもパリサイ人の偽善に警戒し、人を教えたがるのではなく、自らが教えられやすい者でありたいと思います。

祈り 主よ。私たちが常に教えられやすい者としてください。

その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。(48)

「木」はその人の人格、「実」はそこから生まれる生活を意味します。また、「倉」は心で、そこから取り出される「品物」とは「言葉」のことです。「人の口は、心に満ちていることを話す」(45)というのは本当です。良い言葉を語り、正しい生活をし、神にも人にも真実な態度で接するには、良い木、良い倉となる必要があります。

「悪い木」であった私たちは「良い木」であるキリストに接ぎ木されてはじめて良い実を結ぶことができるようになりました(ヨハネ15・5)。また、私たちの言葉の倉である内面がきよめられ、賛美や感謝、信仰の告白といった良い言葉が口から出るようになりました。キリストのことはを宿すことによつてそれができるようになりました。

た(コロサイ3・16)。

ですから、キリストを信じ、キリストに学び、キリストの言葉を実行する人となるためには、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建て」る(48)必要があります。「岩」とはキリスト、「土台」とはキリストを信じる信仰です。「地面を深く掘り下げる」とは、神の言葉に導かれ、聖霊の助けによつて、この世のことや、人生の表面的な事柄からさらに進んで、そうしたことの根底にある真理を追求していくことです。神ご自身を、キリストご自身を慕い求めていくことです。そうして建てられた人生、生活は揺るぐことがないのです。

祈り 主よ。あなたの上に自分の人生という家を、家庭を、また神の家である教会を建ててくださいますように。

私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありません……ただ、おこたばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。(6~7)

聖餐にあずかる時の祈り、「主よ。わたしはあなたをお迎えするのにふさわしい者ではありません。ただお言葉をください。そうすればしもべは癒されます」はこの箇所からとられました。聖餐ではキリストをパンの形で受けるのですが、この聖なる方をお受けするのに、「私はふさわしい」と胸を張って言い切ることが出来る人など誰もいません。人々は、百人隊長について、「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」と言いましたが、彼自身は「あなたをお入れる資格はありません」と言いました。しかし、同時に彼はイエスとその言葉の力を信じ、自分のしもべのため、癒やしを求めました。

『ハイデルベルグ信仰問答』に「どういう人が、主の晩餐にあずかることができるのでしょうか。——みずから、自己の罪の故に自己を嫌いながらも、なおも、この罪がゆるされ、他の弱さも、キリストの苦難と死をもつて、覆われることを信じ、また、ますます、信仰を強められ、その生活を、改めたい、と切望している者たちであります」とあります。本来ふさわしくないものを、ふさわしいものとして扱い、また、ふさわしいものへと変えてくださるのがキリストの恵みです。私たちの「資格」はその恵みから来るのです(第二コリント3・5)。キリストの恵みを信じ、主の晩餐にあずかりたいと思います。

祈り 主よ。お言葉をください。あなたのしもべである私たちを癒やし、あなたをお受けするのにふさわしい者としてください。

主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。(13)

ナインという町のひとりの女性は、若いときに夫を亡くし、母ひとり、息子ひとりという生活を生きてきました。彼女は家庭で父親の役割も果たし、苦勞して息子を一人前に育てました。息子は「お母さん。これからは僕が面倒をみるからね」と言つて、母親に報いていただろうと思います。

しかし、その息子が急に亡くなり、ひとり遺された母親はただ泣くばかりでした。

それをご覧になったイエスは彼女に言いました。「泣かなくてもよい。」それは、たんなる慰めの言葉ではありませんでした。イエスは墓に向かう棺に手をかけ、その中の死んだ息子に言いました。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」すると息子は生き返つたのです。母親は息子を

失つた悲しみから、再び息子を取り戻した喜びへと移されました。イエスはこの母親が「泣かなくてもよい」ようにしてくださつたのです。

この出来事は、イエスが私たちの人生に介入し、人生の不幸を幸いに転じてくださるあわれみ深いお方であることを教えています。もしイエスがおられなかつたら、私たちの人生の旅はただ墓場に向かつていくだけのものではありません。

イエスはそのような人生にストップをかけ、命に向かう人生、天を目指す人生へと変えてくださいます。人の目から涙をぬぐい、喜びで満たしてくださいます。ご自身が死に打ち勝ち、よみがえられたからこそ、今も信じる者を死から命へと移してくださいます。

祈り 主よ。あなたこそ、人を死から命へと導いてくださるただひとりのお方です。

必ず神様に助けていただける

これは100%確かな事実

あれこれ心配しないで

2020年を主に委ねよう

「弟子たちは主を見て喜んだ」

ヨハネの福音20：20

人の理想的な視力は20—20と言われるけれど

私たちの視力がたとえかなり弱っていても

靈的に信仰的に 確かな視力を主からいただいて

新しくいただいて

さらにしっかり主を見る年にしよう

愛と力に満ちた主のお姿をよく見ながら

祈りつつ感謝しつつ

主にある喜びに生きよう

(TN)

2020年

新しい年が明ける

2020年はうるう年で

2月が29日までである

これは誰もがわかっていること

しかし2020年

世界に何が起こるか

自分にも周囲にも明日何が起こるか

誰にもわからない

新しい年 希望と幸いを誰もが願う

しかしどうなるかわからない

不確かで不安定な2020年

真の神を信じる者は

どんなことがあってもどんなときも



Penguin Club

www.penguinclub.net